忠勇阿佐倉日記

第二編 叁

へ遠13
883
8

遠門
183
8

忠勇阿佐倉日記第二編巻之三

東都　松亭金水編次

明治三十六年十一月十日

第五回

賢を黜く佞臣の籌策
媚を献ずる毒婦の舌頭

古語にいへり。君の悪を嚮うに。その罪大なりとも。千歳勝山にさゝぐべし甲賀の冠を受るに及びて。心十分の楽を尽すべし。極めびとのなげきまでに。他人思ふの折うも。雅客死せんに別まゐ。見お巡りて金のこゝろまで。見えず刃称ずもて思なもて。近習の列にありしうも。奥の出入を許さるゝ。井六図内なると同席もて。只管君に阿諂ひて。其職に怠んとて。種々の花真大小とゝく。巧みやて昼夜と別て。君を慰むるの方に正光

いとの同胞となさあれ共不名ひ微しく。寵愛日々に弥増ぬまでへこの程ハ表
方より言上る本家の政事も。総て國内第三人して可否と定め正光ハへも
一通ていひくるまでにそ指揮するに救田なり。さまでハ威勢なりく主君の権
威と凌ぐに至り。一家中の諸士ハ元より日来出入の商人すでこの三人の機に悦
ぶ輩ハ或ひハ役を黜けられ。或ハ出入を留らまして栄辱更に反覆なきまでへ支。是
恐まて種々の苞苴を贈り寵に媚て其才を立んと計るも多く。其が中にハ
書時の嬖妾勝山なとでハ縁故ありとて。密に是が手偶と設けて心と尽し黄
金白金あるひハ衣類調度なんど。競ひて珍奇を贈るなど小栗等が富貴
の眼覚しさハ。拙き筆に編ても尽さんぞ。いよいよ心高慢人を視ること土
芥の如くますます権威を誇りたり。手嶋及の安東隼人ハ甲賀正光が推挙より

より守を育てたる功あるまでハ是より前正光が相伴衆となりし時将軍家にも
その功を賞しめひて北山に方五六町の地を賜ひ。ここに住居すべきとの事厚
き台命の有しかバ隼人ハ冥加身に余りて辞しけれども倍あ宅地を賜
ひし類例なしと争ら拝受なすべきと自身謙りて再三再四辞しけれども
今更に上意に背るべしと恐れんと管領家よりの御沙汰もあまりにて辞しかねて
其地を賜りし。支りとて不知徒にして主君の第ある油の小路へ日々出仕なるが
其年既に六十に近く日毎の出仕ハ疲労なりとて両三年以来より式日の他
ハ出仕せんさまでに此程正光が野心のとり昼夜をいはず出仕してその容を
候ひ心を痛めて在けるが遂に年頃あるにつきてハ以前のごとく式日のみにその暇ハ
家にありてこの頃ハ家を継し詩を吟じ或ハ故人の墨蹟など集めてこれを楽

ことを徹しむべき者ありて在るが。この頃嵐山の花見の人の置く多く人々の從ひ
罵るを密かに心苦しく序もあらば以来を諫め言さんと思ひ居る中まさに人
の噂を密に嬖妾を勝山および井六國内且新条の葦屋太さへ多く君に侈を
勧め昼夜を別ぬなど。その風聞も隠しあらば彼の隼人ハ益胸を痛め。
折て自然営中の批判の不ども獲身に新とを強に諫めおらバ応するものの
不なかりしに一月出仕して速に不言上て宮れておまへバ伺候せるよし言し
けれど折節に心光も粉砕て隼人に遭んも嫌さによし無ず其に進返せと
葦屋太に分付ども畏ずぬと葦屋太も廣間の傍へ進三出奈教も御上
坐に肘うち張ておし進り居るものの速を不言上せんとの身ならず今君にも
酒宴中の奥を失ひ所為なれバ在下代でも兼へもと上意に依て彼の如し即

君の御名代言さる條逐一に兼ねんとなひければ隼人ハ扇を笏になり詰く葦
屋太を青眼て汝ハいまだ面會せねど近曾新に召の列に加へられたる葦屋
太なるや。先頃右の吹聴として吾門きまで来られしハ執次のものより写ね承
條に今日来ても言上すべき事のありて出仕なせしを生憎に御酒宴中とて汝を
出されしと云を條を咳したんと上意のよしハ恐れ入れど人傳をもて云さるべき
條にあらねバまづ止むべし。其由言ひ捨てし上よ作汝ハなぜ君の御眼鏡成
りて召出されし譜代恩顧の者と斉しく君邊に伺候して親しくも召仕るる。身
に餘りぬる冥加の事ども心得ありや心得ずや。頓て寵愛と説り向ハ當下
太蘭葦屋太も忽地に席をさり末坐に退りて礼を儆し。是まで八上意の
趣を傳るとて上坐に居て失礼をもかへりみぬ今の命に畏る。私事には

えいまぐ席を避まとれくとあらう顔色葉太を尻目に掛てねめいそれ形を改め自然らう。隼人ふ對ひて使いの人ふ命のめく在下い新参りの者なぐ。如何なるころ恩遇厚く。侍をくも召仕いまて。譜代の法士の上ふ立御憚ふ為れあるねど。元々士なるの君ふ仕え家を捨て富貴を稟ふい一世の栄となる所將来を憚ふて法人の下ふ屈せんるい元来新人所ふあるに然まば君統の辱ふて申訳あや有まぐさと答ふ羽を笑人い冥果なれば心ふ恋まぎれ君ふ事ふ為を得さう。然まとも葉茂太汝ふ問ふ一後あり。

并いまと別のとあるに。黄泉君の冥恵ある。勝山い汝ぐ殊畢竟なまの縁ふ因て。汝ふ重く用ひらまと思と為へる分てあり。世須臾の此行状全く性気の人ど。當中出仕の法ふ為く。且暴猛酒ふ耽ひの加縛辱くなど。世ふ陋

為れ家女を居。糸竹の鄭声を重ぜ〜まを大切なる忠家の政ふ大ふとなく雀べどくくなるつる。

新并六沃堀國内まと汝と三人して主君ふ換ひ。指揮を做まと家及ぶ是笑い君のい迷とまを去りのくく汝なるふ。なぐて誅を奉つぬ差陳めて容らまさまべ宮

指め老臣。そのよう遍達なまぐさ若を部て已なるぐ藏のぐく扱ふまこと安くくと。

冥て葉茂太ふ猪を進め。并い汝ふ判ふいへど。在下い今云ひぐくを者召まーりの

なまべ。新ての化法ふなく変へば先達なる雀新沃堀ふ此く世よとの伝達あまべ。

そまを得て扱ふのこまと君當中出仕のこの年宮く共らん辞くなどの家女のこも。

こまとまと吾この新ぐざる所然まども吾殊勝山ふ為の指め。紙園渉で法人の酒燕の

典を副るとなる。活ふ并とせーりの為まべ只爲是を咲う。なの辟を召て猛酒でも勧

むるくんと炎光の推薦。這い理ふ仰くまども。在下笑同胞とりふ。新大恩を被

うりあるべく君悪うしとなげうち為べき深くも考へあるべし。然は是天の御宮の御定
鬼を在さるべし。一天四海の安危を。掌中の人に分ち。常に公神と呼ばるゝ然
まで折ふしを箇件の葬敬を倣ひ。めんとも。丈と仰ぐ。深めまとさん。彩色さを足
らぬ在下等ぶ。侯ひ知るべき疆ぶ。絢び知るべき英光が指揮を任せん。此うえ弟
事公を副て。旅ーのいまと額忌び隼人の家とこの庶僕よ。終に家を礼まべき。
萠ありと感むりのうち。今い頻りに君に乾酒く如何とも。全なけまび。主任のイ
退出り。輩に義太ら奚へ来て。徒唯今此とあり。と隼人と已が問答戦清も
なくいのこ死頻りに君の非を率て諸りうとこ云ーるべ正光を」と熟考て。
いまど右左の綱もあるに非ず。并六国内進こ侯ぶ云ふも畏き不為あるべ。今輩義
太がまをを陸に。陸ぶ居を密ぶ君を惑りて。見ぶ眠近ー奉る。竟ぶ家の改ず

とさえ君ぶ興ぶて自由と倣ふと這と第一ぶ家捨ぶるれ。雑頭ぶあ中ね
ぐ安東い老臣あり。殊ぶ君幼少ぶ渡ら世ぶ人ぶあ扶ぶ。心を碎き補佐
ぶて今かく上ぶ接物を握ぶ人ぶ安東ぶ忠義の致ぶ所ぶて。義ぶ
おさえ沈黙の武内ぶ伺ぶ。功あり。然まび任意心ぶ怠いぶ。とぶ死頻
といふこと。爭ふべきことぶあるべ。只頻ぶ両個ぶを習とをざけらま外様
とありて仕えん。此張と出弁ぶ。欲ー。とまさま。刃ぶ畢らぬぶ。侯ぶ勝
ぶがまぶ。満面ぶ愛へと含こ。崔敬決沼両所とも。刃の中ぶ。あるべ。開ぶ。保
の差ぶあり。兄輩義太ら刃と。吾倚熟考ぶ。隼人ぶの。口定素性
も知きぬ吾仁同胞暴ぶ君の死を。ぶ。威勢あるを。猿むりの。開と。ぶ
いの恥く。ぶ。分ぶ両個のこぶ。撥へて。実い家仁と。翁悔ぶ。ぶ明ぶ地ぶ

一 初てまあ。さてまた吾們陳ぜ多れ君ぐ素老と被ゆ多ぐ。初言さぐ大恩と奏人
一 初ぬふ仆まども今ゆ西個ふ脚傷つ。鏡と擂ひるひるぐ。老臣なるのみも
休ミ且吾們も後安くて幸ふ長閑の月とも看む今かく云の山蔭ふ徒候も
及ぶ我分の柔腰常言ふ人果報ふ焼て傷の藤ミと車出一ゆる不内の富
実と稟まぐゆくん兄公ハ何と思ぶもと。筆爲太と祝久まぐ頻ゆふゆく
点既ていくも云ゆ吾とても。公大半決定せり。雀新沃堀の両黄兄今勝
公ぐ言もゆく。在下もまさてゆ云ゆり。此前宜ゆく祝成さまて頓ふ脚と
傷ゆる。汁ら人ゆ人と分と酸巡て公程いひさ知くまと。寔ミくて額光稀
正光と是等の体を祝て。頭と左右へうち揮ゆひ。老臣ハ使ゆまて。任云
管領家の指揮ゆりとも。ゆゆ西個ふ脚と考るべき。何ふとゆふ法等

両個。いく吾公ふ恢ふまゆて。猶ふ新老と捉ゆく使ひ冤老と云人加ゆるのミ。
汝等何の罪ゆある人の族ミふ罪ゆる去と成ひ逐ひ成ひ教さ。傷臣
絶ゆ期ゆく考。是ゆ家の孔と生ぜん。受て考ゆ恢ひゆく。ゆく井六
國門等ゆ生と青日ゆ云と得ゆく。各ふ撰ゆて政ゆと做ゆと。何成
ゆて形ゆふや。尤他辞ゆ内ふ貴ゆて。汝等ふ計らいせ。ゆさ人ゆしと是之
しゆ。弁ゆ吾指揮と執次ゆ。殺て自分ゆ計らひゆくわゆ自由ゆ做ゆと人是ゆまさ。
言葉と切ゆ人と隔ゆ。渠等ゆ為ふ惰ゆく。汝等ゆ罪猶深し。隼人ゆ近曹
出仕ゆく。行て眼ふふ看ゆまゆく。已ふ諏ゆ人法人のにと。伝ゆてかゆいふゆん。
渠昔内ゆ吾ふ忠ゆり。然ゆとも今年老て。次第ふ耄ゆ病ゆ夢ゆ。ゆ
まゆゆも言ゆゆん。ゆゆ吾行状と種ゆふ傍ゆがゆくゆひ做ゆも。案ゆふ

かつ山
と
く
説

まさ光
勝山が
妖計
深夜よ
正光と

老の僻み。吾ごとにいまだいとけなく。秋を去と必ずあるべし。然まで浜然むへ。幸
ふ物ぬくびと微笑ミ給へ。元来四個の仏。強て其身を遁んと思ふ事非
ざるべし。再び右左の欲ひ物なるべし。千俵迫て両三日数い程人も董孟太の行心程
頼みなしまで。そひ迫まを安東隼人い。古老との仁旦黄家ふ大功のある者なるべ
君ゆまと重ゆ。後て吾仁同胞ゞ身の仇とるべきの必隼人ゆ人さあり。
今しも君の家を得て同胞栄華ふ待まども。元七君の統者と年老人健ゆ
とへ。久しくしと嘆ぎ。冗御も弛むふ及ず。渠ゞ為ふ然けらまん。若ゞ黄門
の威ふ来ゞ。まゞ酒隼人を元者とゆまを殊ふ上ふ来ゆまを。奈河ハせんと人知
ぬ日夜ふと苦めゞ一ツの奇計と巧ゞ出し。一門殊勝ふを。密ふ招きてその次
第ふゞ物語と説ふまを元来ゆまも護身剣ふ隼人のゆまを。その移計

を屡頼て。雀の鉄砲の両個ふ。ゆん身虎を弾らひる人者ふ妾ゆまを。
を遂んとひけふぞ。董孟太ハ移密ふ絡らん。虎ふ人別を。彩て勝山
いちの夜さ。侍女とりこゆ退て。君と両個の閨のうち。枕ふ焼し空粧の
ゆゝぬ薫ゆ匂ひ。いと寂やゆ。ふ夜中頃。勝山ハ寝ゆゝ。独組繋ゆうち
對ひ頻ゞ。元ふ顕を。移ふさしいを。仕負物ふ。正光を青の酒ふ。ふ後日知
らん熟睡ゆ。不図眼覚ふ勝山ゞ。ふ形のさゆを人ゆ。何時ふゆつる。
いゆゆを。森もやらで。常ふ掛ゞ景勢ゆ。素来と森と吉ゆらを。勝山
昼ふ公著ゆ。面持て。形を改め。此方を向ゆを物いを。傷伴の縛りて睡
を拭ひ。吐負物ふを正光ゆ。ゆと。ふ嘆ゆふ勝山ハ。ゆと笑ミて聴
ゆ修世。見ハ女ゆ。ゆ。由ゆ元と。按し苦。與と。碓さし。奇と。罪と。

許しなくつひにひとり猶もうち淫して、物とらんとさへかなげに光右ゑ左訝りけ
まだ褥の上に肘を突き、泪を流くまでの傍り、鉄が顔をつくづくと見てゐたりしが不意
に鉄ぞしく頬擦りて貌とろへ倶に暮ざる心地せられ、かゝるものゝ気に涙で
かくは心の引立ねぞ、頼みし人と屡問まて、腑心は命のかぎり。諸手を差そへいへ
ずら別の子の身は存り給ど、随しき賤が身なればこそ。頬ひ稀なる貴人も縁あれ
ばこそ旦暮に横陳さへも許されつ。上なき寵を受給ひ。その身の果報は
前つ世に後の若ある徹しぞと、日毎夜毎にその恩を忘る間は何とも給ど天上
に住む女人にも。衰をやはらかく。況く賤しき吾們なれ。盛衰栄枯その
離若も。あるまじやれと暁めても。猶欲りけるこの身の上とぞ、かなしの終るを。
思ひ辨へあるまど。此須見の輩太が云しし上に安東ぬしは元より江家の出頭

なる君さへ斯とおもへる人は況て、その以下の者に於ては起きも臥さんも彼人の
心の隨意なりぬるを。然るに吾們こゝに来りて、よしなき恵みを稟るとは簇し
と思ふ心裡は、計り知られねど限りなく悔しきまでに妬み及べき。所詮かゝる人に憎ま
れては君の傍に末長く仕へ奉らんことは惑ひかなはぬ、何ぞ同胞倶に此処を遁れて
生恥を晒さんよりは。いとど哀しき身を迫まど然こそべしとて
かくまで稟る鴻恩を忘れてくらき泡と徹して、ひとたび出べき本位存命
て若許の苦をせんよりは、いと易きに覚悟して玉の緒の切れをも惑し貌ぞ。
まさり縦ひとも悩みても。心弱くて支へも果さで、欲き条するも心裡でくさと
まで唯何とかく眼を瞑るが世とこそ兎の審るまじ虎伏も野の草
刈ても世に存命が行らしうなるものをなるまじとて果敢なきものゝ空怙

めふ。惜うぬ日と送りも せん。頼りさるべくもあらんと。
祈る命の惜うて。さても別れんとすと哀しとらひ。古へ人の心を尋ね捜さ
ば哀しさのいと八百日や。涙の玉砂の玉しかも恨みもまども絵方のさえ何
方ぞと偽て。彼が伏屋ありとそ。門に雪井の月の新しきと葉と乗て手
屋に。猶ぞ捨ぬ。源氏の君の五條渡りの。歩行の例ひかの
彦星ぞあるなる。年に一度も訪ぬ。息あるうちの年こそ足てあ。写絵人
とらひつも。屋敷をも拭ひ或ひ紙を或いまと笑を含こて。涙の情い
とも濃やかなると。実果て正光ぞ。心の交ふうち惑ひ。碎るぞ。ぬく衍佛として。
要の詞もあるに。ぞ哀ありて。涙を起し。年人の家の長に。あまと。年波
の周腕と絶まで。ぞ悔むとのたまふ。開い花の後さ云ふ。ふのこ心ぞ留るの

よと。涙も果ぞ。妻こそ。女の身ぞ。とびさまもあるぞ。見さえ。既ぞ。初まとせば。年花
の絶ぞ。べき。右左のとと宜ふ。より。頼ひぞ。任ぞ。と。再三に。説こそ。うち。歌くち
景勝の。普賢。櫻ぞ。表ぞの。年と。常ぞ。凡情。あるとば。正光。いとく。変感ひて。所絵
絵面ぞとそ。比翼連理と。契とそ。中と。今さ。歌べき。ぞ。ぞ。まと。改ぶ心の
落ぞ。やぞ。ぞ。計らぞ。幼稚と。ぞ。ぞ。為ぞ。功ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。
孤ぞ。ぞ。ぞ。渠の老体ぞ。吾ぞ。この年齢ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。
恋ぞ。ぞ。と。許ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。
ぞ七八分ぞ。ぞ。と。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。
あぞ。元来。ぞ。上下ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。
向ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。

饑のある程ハ人も指を喰ひもすべし。南風吹て竹と竹内にむらがり争ひ食さん。
されど幼長の異ある所。殊に竹ハ老たれど年人ぬしも。恰悧智量のあるなれバ。其処の
いまだ心附ざれと思ひ侍るなり。其の條をもて喩しなバ忽地に氷解し君を侮
まで言をなさぬ役不為ハやめるべしと人々に示。先北叟咲て。今に指めね汝が言條。
いかにも今の伺のむしどもハ言なり。然れバ我ハ今其意味を諭さんや。翌夜竹等と商
議して。其銭を程よく計らんに。心を易く臥寝よと惑ひ溺れて主君の顔脇
山親ありて荒宗笑ひ仂なる兄弟と支れど生でに足し湯なる心の辱ならぬ五百
生の世ハ掛るとも忘まずや胸の思ひの雲を晴させて月と契るとの難しく
侍りと満面に笑を含こそ媚を献ぜ。嗚呼との毒婦が舌頭に忠臣不與哉
彼やそ長く家門の憂を遠れ慎むべきの情慾なり

第六回 民ハ直なる課役の大金 聚斂の臣人心を動揺れ

再説その次の日井上八国内葦葭太等を。侍をく不呂寄て。安東年人が功に
誇る吾壮年に及びても。猶幼稚なる獣まる条以の外なる奇怪と思へど。
逐躁ならんと思へども。美人べき咎もなし。如何にて乗らんや。汝等篤と商議せ
よと命せ三人を兼ねり畏まりぬと言稟るに。這ハ葦葭太が密に謀ら
ひし妙計いかなる其胸にあるものか左右なくハ口も出ざれ雲内あかそ沢堀園内。
雀彩が耳へ口を寄せ。低語侍を做しけるに雀彩ハ頻りに点頭て妙なりくとの
謀究めて唇くうち笑みて。頓て両個にも扮へ声を低うし一箇様々に做し
ならぬものを暗に示れに足ねべし。若畫下に怒を発し。よるれ无礼のあるらんあハ。

そもそも尋ねて出仕を徃め然けらましかは君が陀宅この後へいかにと云しければ。正光大にうち笑ひて其の鐵心によく似へ孔明ヶ房も及ばじと称揚して密かに。その準備をぞ做しにける明れば四月望の日として朝賀の為にせざきより廣間狭しく居並ぶ諸士安東隼人も式日とて小山の第を出郎館へ出仕して例の席に控へたり。程なく甲賀正光も礼服を整へて上坐に有し居て隼人以下諸士の面々當日の賀を述るを受て徐ひ出たるに、吾久しく疾労に因て引籠てありし処既に全快に及びし間今日より出仕做さんと思ふその旨あつく言渡して命にまつし諸士の面々祝詞を述て平伏し盡下座禄并六ツと沃瑞國内進と出君は平快の御歓び且は出仕の御祝儀兼て一同へ御料理を賜ふべきとの御沙汰あり。ける席々に控へられまよし宣て命ぜらる疑き由を申して平伏まし程なく持出ぬ給仕の扈従等伊勢小笠原の礼式にあるも恢ふる眼八分七五三にや五ゝ三にや。いと叮嚀なる膳部のさま安東隼人を始めとし中老側役物頭その他給人諸輩まで各居並ぶ面々へ饗せし居まへ雀が沃瑞玄米と頂戴ありける。とりわけ名類着て先一番に安東が箸を把て椀の蓋開きれば汁とは思ひきやいと細かに刻みたる大根おろしへる竹あり心裡に訝りて汁を見れば竹の輪切平は切竹まさ節を魚の切身のやうに盛たり。この戯まで心に解さず。丈より壺皿に二の膳の汁も茶碗もこる竹また形の種々換るのみ更に箸く安東隼人もまづ箸を閉て視まはし四辺は寒の食にて美味気に食ふその在容いよく不審は勝やすれかかるあると手を叉きてやうち案ずるその折から正光声を挂あひ。ても隼人その料理の心を汝解しうりや。如何にとあるを隼人は叙あげ愚案の

老人いはく。孫さこ玄味とゆ存ぜべき。行路の難をとゝ水ふあゝ。まさこふも
あゝまして人情及霞の間ふあり。と自展易就ふ賦しふ死ぬ。這い彼佞者ろ図
くき思君ゆゑ在下と辱めらる。一計とこそ存ぜるゆゑとゝ。ゆゑ山光然ふあゝ。汝この
家ふ大功あるとゝ丈ふ誇りて我玄ふ募て。今日ふ到りて日。吾と幼稚の者と侮
ふ。乳象面ふ人ゆるゝ丈と示さん為ゆゑ幼きその程い骨節も和らあて
汝ゞ陸玄食まゝ。けん今い全く千尋ある。行とゆゝ有りくふ。悦さ蓋も決
して玄難ろ。その理と毋へ曉らゞ。他ふ人べきこゝあゝ。ゆゑ出仕の制限ゆり
ね供の准備ゆ整ひぬゝん。去来とゝひて玄ゆゑ人ゞ雀於伏堀ふ入ふさ。大蘭も
疎より刀と持て。一間とふ警蹕ゆ。声ゆる共ふ立出ゆゝ隼人ゞ忽地身をひき
起し走りて玄関へ馳まり。ねとゆいゝ平伏すると尻目ふ掛て出らるゝ。

隼人と語ゆ雀於以下。三個ゆ元の席ふ戻く。当下隼人ゞ四方と釈まゝ。
君君さゝゞとゝふとゝゝ人どゆ。ゆゝ人ゞ。吾君近曽ゞ行状ゞ宜ゝ
ふゝ。此程疎と奉つんと出仕ゞ。ゞ出さ。
その玄と言せとあゝふゝ人ゞ。ふまゝゞ退べきゆふあゝゞと退去せ。丈ゆゝ
ゞゞふ障りゆゝけん今日の料理ゞ。ゞ且ふ功ふ誇りて。我玄ふ募ゞとゝ雀於ゞ
幼稚の者と侮りて己が陸玄食しゝるゞ。食ゞゝ玄ゆゝ濡衣ゆゝゞ言ゝ解ん
と思ふゆゝ。業蘭園ふ茂ゞとゆ。秋風ゞゞと彼ゞの慣ひ捨ゆゝゞと思ふのゝ。
今日久ゝふゝ営中へ出仕ゞゝ。ゞゞゞ折ゝ右左玄ゞゞ不忠ゆゝ。とふ於て
ゞゞ禁ゞゞ。一言ゆ発せぬゝ怪むゝ人の為ふゝのゝ伍子胥死して呉王滅び范増
玄て楚ゆ弱ゆゝ。ゞゞの先祖ゆゝゞふゝゞ。辱らゞて怒ゞゞ発ゞゞゝゞの忠とふ

りのあるべく各もまさ年若く血気ふ任せて才を矯まを吾この云を努み忘
まを怒る故ふ吾い怒らべ這い君上ろ志ゞ多を。誠あのふは料理このまを是
を拜領を。ふ孫教流の竜鑑とろきん忝しと有り戴き一二の膳を左右ふ拔ろさえ
舎弟ろいを退を出波三個い業ふ相遠し。実ふ虎竹と弁ろくて。いろふも食ね
老耄よとゞで口糧ふ吹くのゝ居並ぶ諸士いまを紛て。慢ふ甘ふるもあを。
牛ゞ奴ゞろふ辱ゞろらまを。阿容ゞとゝて遠くを勇ゞあ犯ゞ者と嬉るもあを。
かゝて其日の赤の刺ふ示ふ先退散ありろまべ井六振めはおふ候ゝ。今日の集
と人ゞゞち挙動ゞるひの外ゞるゞのゝて形谷むべき虎ハあけまゞ。満坐のゞ老ゞ
まゞふ辱ゞろらまゞまゞべ紛ハ後いゞゞくはを出ゞゞ。然まべ結ゞ恐けくるゝ。
孫ゞく僥倖ゞりと是ゞりいゝゞ益雑ふ憚るゞもあゝゞと日毎の招宴止

時ゞけまべ物の費ハ限をもゞく。ゞ溝富貴の家ゞまゞど。府庫ハ溝ふ空
ゞくゞりて。財宝を投ふ殺ハゞ。金銀の足らぬを憂ひ出入のゞ人甲ゞり。
備今をゞゞの内の用ハ辨ゞるゞのゞゞ。この出来秋の返済方収納を紛ゞ
引足らゞと。其由雀紛井六ハ書を紛て上のゞゞ云を何ひ是ゞと浅ゞまゞべ。
井六伴の書を紛て國門董ゞ大ゞと商議ゞ。是ゞのゞを逐一ふ君ふ何ふ
生ゞもゞ。吾ゞ三個兼ゞて上京と呉ゞを江ゞ。和縣ゞのゞ演説をゞん。
即一書を認めゞ発御を紛て遣ゞろ。近江ゞる頃所の和縣ハ。苛沢畦里花
田酷平両個ゞゞゞ花落より。飛ゞ到来ハゞゞゞゞと封を披きて一覧ゞろふ。
歳年不内の出用途多く徳所人より借入をゞ。まゞ歳ゞをゞ済せゞ妹ハ
かゞゞゞ返ゞ無ゞ。証文ゞ遊ふ和ゞゞ。ふゞゞゞ歳収納ゞゞゞふ財用

さらば民ふ課せて五千金を早く整へ進らせべと上意ふ依て執達ふ仕を。
くど 別のやうと強めさう。両個いとまを熟祝す。上意とあるべ拵あるべまつ莊
屋どもを呼寄てこの旨をいひ渡さん。と暴ふ村々の廻文を認め。歩卒を巡ら
せ。ふ時刻を移さぎ何用と知縣の門へ入来る長阿佐倉あやくり花井
愛右衛門と称へ千葉の忠義陽同田の重三郎高須の左次兵衛先
年辞世歌を嗣る虎次郎。もと滝澤の六右衛門。手代頃知有べく。三十八箇
村の莊屋とも門ふ挟へと歩めき来る。知縣ハ稼て公同所へ進と教を受て連
弘逸と名を帳ふ録て七側八側ふ居流まさせる。苛沢畦里と荒田
諸平威儀を正て出張る。汝等を呼ハ陽の義ふ有べく。遠田領主の用
定まる他ふ五千両の金子を須へ進らせべさう。花浦ようの山沙汰

なるべ。その心を厚く云渡て早く須達差上べ。と云ハ波せべ一容ふ畏まぬと
言葉なし。この門ふ舎所と定て莊屋の集舎所あるべ。各引取べ。
この近郷ハ領主より。用金課役ハ成くあるべ此方ふ老職ふ安東力
の称の外ちひよくて。牧年の間先ふ立て這回ハ見ふのみと云ふ辞せん事臣。
金帳出て戸毎ふ集め郷毎別倉申ふ。不日ふ納む方と云ふ。
ふ程ふ拝銭ふ及ぶ次決ふて各住所へ引取ふ。僅六日の程ふ六十万銭ふ。
さ云ハ速ふ納む。遠面ハ多人数要るのけるべと思代て人の長花井義右衛門
千葉の忠義。滝澤の六右衛門の。かの用金と泉斎。知縣の公同所へ納めるべ。
畦里諸平五出て。速ふ大ふ喜。連帯の証文を速ふ出べ三個ハ
大きと収め。郷ふ帰の。帰ふ解ようと。解ようと。

酷吏
農家を
巡りて
租税を
債はせ

毛見を做さべしとて苛沢畦里の西近江荒田酷平の外の方と来る二隊ずつ
さて其の荘屋どもを先ず率て巡廻して年の貢の多
寡を定む。さて張れのことあり。人君恤と称む
ことを尊て阿諛の小人多し。実ず此頃甲賀正光さ拉典ず耽ぜりて色を重
み財を貪る。その弊忽地下に流れて元来その性貪婪なる上ず諂ひ下を虐ぐ苛
沢荒田の両個の今年の租税を取増て不法の恩賞を被らんと多く欲念頻なる
ま民の艱苦を見ずして適水旱の患あるに。登半毛ず生ずるに傷所も荒年の
時ず弁ずべき多の租税を充るかどず民苦いとまを続き歎きその苦しみを
ん。知縣自分毛見をなるべきを。若ず箇程の不毛を入るべき多の租税
を充らまでに吾何の所作あるべて又切妻を養ふべき。陳ず狼死計らひなり。

あるをとりて知縣ず。愁所傲さんと水旱の患ず罹ず村々みな一円ず
最寄ある。香蓮院の書院ず聚ず。彼よ是よと其ず或ひは跳ず或ひは歎
きて置々ありて詈ず嘆ぎ既ず愁所の状さ出来つ人数多く泄て法
所なくて袋ず入らまて。歎頻の筋空ずなりぬ。荘屋の他ず人七人開ず闔取ず
定むべしとて張あり気ずいあるべず不ず吏い宜しきべず責ずの知縣苛沢荒田い法
欲あるのく美量いあるべず動きまべず主君の威を権ずはかくず詈ず。得ずと多数
丞ずまべず。この人数食ず拉て訴へさべず吏ず怖て忽地此方の云ずず人人い必
定去来性祇と勇ずさの去ずりまべず生中些の思慮あるずの吏ず深ず
荘屋を先ず進ずて既ず書院を入ずと既ず隔紙ず声拉てずく各盤
その人のことあると呼ずて雑ずと既ず隔紙ひきあげ。出来ず荒井貴宅と千家

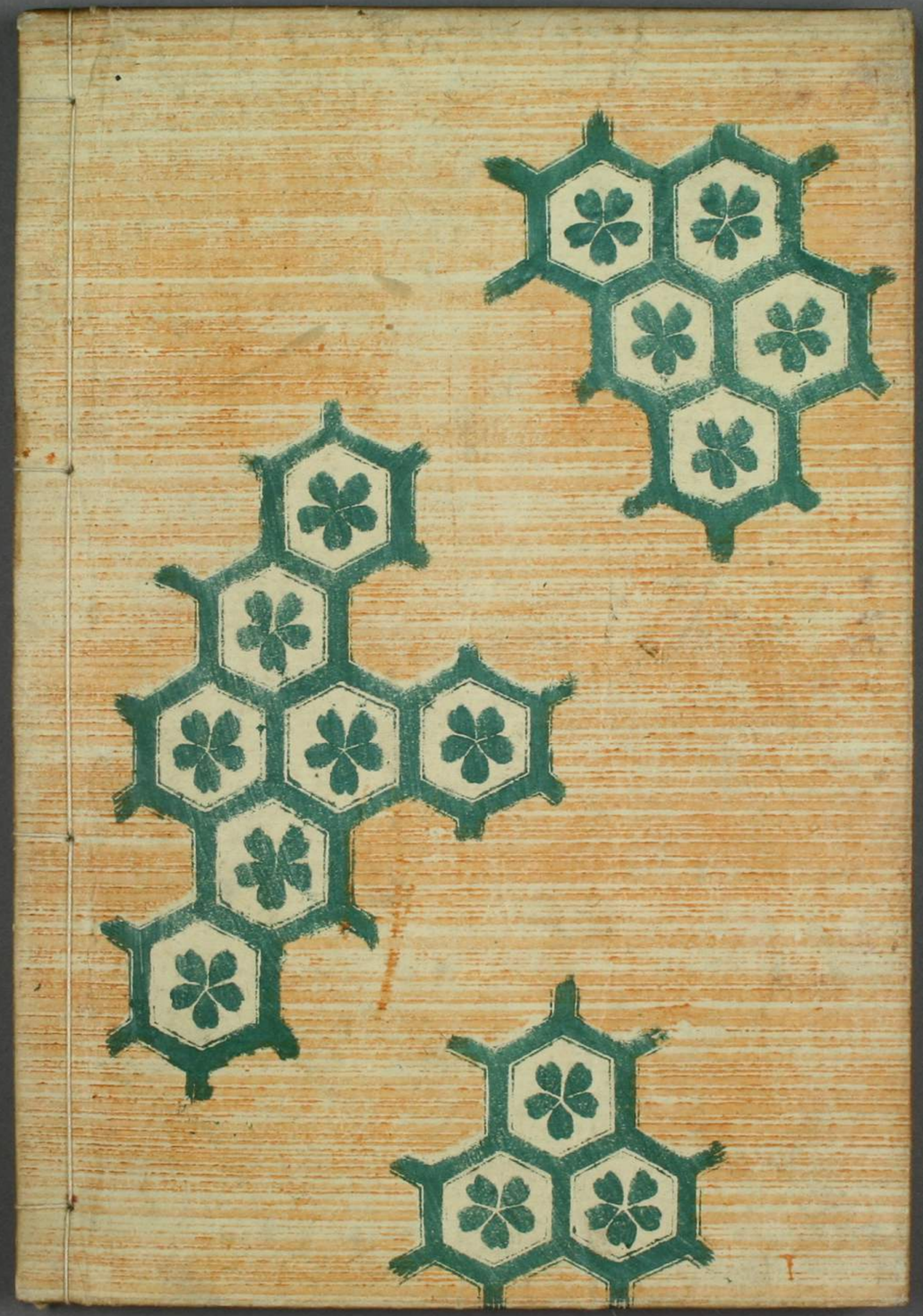
の忠孝両個あり。這い様にしても恵実あり。他の困窮難義を救ひ功あれども自ら誇らず。実ふ君子の風あるべし。敢ひ言まざる者か。然まで箇程ふ威勢迫ざる。わがあまりと金引返し。腰を屈めて一往ふも貴下貴者の上座ふ居ず。佐倉ふ貴殊の租税非度のことふよろう。愁訴と合ふ。実ふ理を極の公中吾们深く察する物なり。今年いふ中一容の凶作といふあれば。其件の八九箇郷或ひい湖水の様ふして。不時の大雨ふ押流さまるる凶著い用水之早損まるるど皆ふあるべし。然まどもよく登ら然べ。毛見ふ為て用捨ふ強ひ。是元ちのことふ。その沙汰ふ及ばい和縣衆中のもひ沖せのみるべ。然るべ多人数門ふ集会。愁訴の仕い理あまども。是下ちと上を犯まる。咎ふのといひ。厚べ。まづ這回止まるふ人数のこいを吾们ふ拘ぎへねるふ故ふ人の吃驚を顧ね扱ひくと思ひまんぐ。彩いふ人い此方ふも聊か宗のあることあり。公を実ふ愛人と為べ。頃吾们ぐ志中と貴べ。他ふ同まて農人们ふ膝ふ手を拱き地ふ射て右左のことでいたんい鳥滸と為べも右まど今年ハ不時の困窮あり。手ふ人登の山さを見ぐ。去年ふも倍る租税割着ふまでい押仮ふ願ふ見るべ食まれ仕宜。作年ふ愁訴と合べ。止めのべ。往まふ廿人足下ふ為ふ行ひ用捨と頼ひ。ふるのと。結まて向まて忠義ぐ用捨いふ。ふ人ふ為ふ他ぐ支配まる。阿佐倉の八三十箇村い田畠の登度ふ変ら民然まで豊ふ為ふ他ども。米粟とふ不足いふ民是ふ放て来年の出来秋まで食料べ他ふ他ふ為ふ他ふ。食料ふ為べ他いふふ手段の為ふ人ふ任宗愁訴と做べ。一箇年の食料ふど用捨い決て為べ。こをもて各ふ動ふ為べ吾们ぐ宗の為ふ各

も公を労さんと上をも凌ぎ。父母妻子の養ひ達へん。かく云ふ上たるの人定まる
諸員に食料を給らんとて更に疑ひ怠あると両個ゞ赤公吏ゝに農人們い涙
を流す。什麼哥々等い神社佛社他の打麻に公を労し上の君を下もよろまと
計らゝに三の涙辛き浮世に来年の秋まで食に救米の糧を給らまくい三
千世界の廣しとの人どもあるべくもなる仁人多う領主に民の父母とやら下と
恤むべき職と家ども苛く責候る。なの貪欲に競べたい氷に水晶月に泥亀棘
に牡丹の美をも床し。嗟嘗るとやと二月に歌び勇ミ掌を合さるるに歌まれ。
両個いまを紅ゝに歌び面に彰いまを。玉泰の矛とも願ゞ流し貞
烏餅ども祭めもやらで歌に美諧吾倚こそい谷に倍まで擬ちくるるを慈
らんに丈の人数を問べたいひ紙にもべくしや美案の嬰児も一人の員あるあるぬ

庵ゝといと細やに演説ゐて。各ことを退散た。此風字の者を近ことく。必ゝる
ゝに書食ゞ計らん。今に指めれてるゞ。仁もあり。まさ系もあり。此人ゞと未
ゝ。国郡を治めさせるべ。昔谷に北條の泰時あゝび時頼ゞ右に出べき
智量なると可惜古民にうち雑らて。孫玉徒に碎けんとて。扨惜けと仏
の。徒の老温し味を。かゞに涙けとゝ弘福禅寺の。狭牛和尚もとゝ。
童ゞちゝ人亜に勝ゝめとゝ。書吾忠義ゞ這回の一挙。実に作ゞべき
働ゝ。仏中に歌びゞ一日両個とうち拒ゝ。称微して依に。待ゝと
ゐゐ。これも年ゝ擅中に収納の米麥遷ると積ゝ。三百斛ゝ。
食遷ゝ。ゝ個に異ゝ是とて快く。ゝの補に年ゝ吾ゝ九旬に及びれ
ど。終る旅ゝ做ると。今のことゝ実に及びて。歌喜に懐び力と合を。実に

ゴブ酒の長存ありと。禪師が刻ホ両個も。俱ホ歓喜し額ゑて。佐その米と麥と
と結而件の料ホ充けるが。このみもまさ隈きるくて。某の寺院其の豪富御所汁
のある族ハ。ことまもくと両個が方へ米麥の助力とるまこと。ホ能てその糧と給るホ
公易うろう。徒ハ孤あるまを必ずも。儲あるまと聖者の金云今さ〳〵ろひ合され
人ずるうけるとでもあり。丈善悪の應報ハ影の貌ホ陸ふ〳〵と。這ハ往昔の確
言あるまど。佛者ホ不謂ゑ玄現在の因果ハ遁まあ在理あり。況や人の今ホ為る。
生ある者ハ必ずあるべし死を。堯舜既ホ仁徳の宇宙と義ひ多とど。斷ホ驅せあ
と叡つへ。こホ麦宮が母の能稚ハ。で仮初の感冒ろう。次第ホ年重ひ紀
ぬまび元来孝公比ひあ死。麦宮ハ昼夜侍と離まび。元鄙ホ入あるべ。人
人ゑ崇まるとまた。五里七里の遠方ろうも。名ある医師とまるひ来つ。物茶

荷前ホ公と絹。徒ち松尾の社既及び。麦ホの寺社その員多きも丈この
人術禳と乞て。麦病平食の預竜の。ホ隈もるひまをホ丹孫一方ろ
らざまど。玲王の使王公も。免まがこひ。慨ひあ。六十八某と一朝とろ。朝の
ろ。ホこ閑〳〵べ。麦吾ハ更ホ泣焦まて。天と仰ぎ地ホ俯抑び悲歎やるかさる
けまとも。行て帰られ冥古の旅。まさ為ホ仮方ろ。人ホ厭まされ。又麦
存ホ思ろハ健ろべ。古稀ハ遠ホ新くると。亡母の為ホ身も弱らべ。維ひとまと斉
まんねど。孫めらまて。閑〳〵ホ。野を送りと果しけり。渾家の旅千代も侍ひるひ負
操女二の掃女ろまび。歎きハ換らねるひるまど丈ホ屋て。老る又ホ嚴畧あて
てハろ〳〵ホ罪恐〳〵とそひかへて。涙押へて且言ホ。伝実ホ事へろ。麦ホ歩も
今更ホ。老てハ倶ホ憑まる。渾家ホ後まて筋骨とも。抜まて仏地ホ弱ひまど。

者吾夫婦が比ひなく。伝ふ事なる志し。まさ孫どもと寵しむ公ふ御慰めら
まて。歓きのうちふまさあ日の。弱の足強の疾くこもて七七日の佛ふさ人法
営ん果しつ。中陰るこて夜衣。脱い更まど狂紬の。乾るるごふるく歓ぶけ
法が。新陰月の中旬ふ及びてまさ一層の苦と溝ゞ大ふ公と悩まる。遠い
何者の釈ゐぞ。次の巻ふ解分る。

忠勇阿佐倉日記第二編巻之三終